1 May 2021

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 20

オーウェルとヴィクトリア朝的なるもの　川端康雄

ジョージ・オーウェル（1903-50）はその生没年が示すように、ヴィクトリア時代を直接経験してはいない。むしろ幼少年期であったエドワード七世時代（1901-10）およびジョージ五世時代（1910-36）の最初期を（とくに彼が育ったオクスフォード州テムズ河畔の町ヘンリー・オン・テムズやシップレイク村での牧歌的な暮らしを）自身の「黄金時代」とみなしていたことがエッセイなどからうかがえる。それではヴィクトリア朝についてはどう見ていたか。以下、それを記してみたい。

『一九八四年』のなかのヴィクトリア朝

まずは『一九八四年』（1949）から見ておこう。その冒頭の章で主人公のウィンストン・スミスが自宅の〈ヴィクトリー・マンションズ〉の 7 階のフラットから 1984 年のロンドンの町並みを見晴らすときの描写にこうある（一部原文を入れて引用する）。

「一キロ先、汚れた風景のなかに、彼の勤務先である〈真理省〉の巨大な白い偉容が聳えていた。これが、と彼〔ウィンストン〕はある種の漠然とした嫌悪感を覚えながら思った――これがエアストリップ・ワンの主要都市ロンドン、オセアニア国のなかで三番目に人口の多い地方なのか。昔のロンドンはずっとこんなだったのだろうかと、彼は子ども時代の記憶のいくばくかをしぼりだそうとした。この朽ち果てつつある一九世紀の家々の眺め（these vistas of rotting nineteenth-century houses）はずっとこうだったのだろうか。家が倒れぬように側面を角材で支え、割れた窓はボール紙でふさぎ、屋根は間に合わせのトタンを張り、庭の塀はぐらぐらで四方八方に倒れかけている」（第 1 部第 1 章）。

この小説で描かれる都市景観はオーウェルが執筆していた「窮乏の時代」(the Age of Austerity) のリアルなロンドンを下敷きにしつつ、そこに〈真理省〉をふくむ 4 つの省の建物を 20 世紀半ば以後の未来建築として際立つように配置している。その〈真理省〉は「巨大なピラミッド型の構造物で光り輝く白いコンクリート建物がテラスを何層にも重ねて、三百メートルの高さにまでそびえ立っている」。

19 世紀の人口激増にともない、イングランド北部の産業諸都市と同様に、ロンドンでは中心市街地が過密化するとともに、貧民地区のスラム化、また郊外へのスプロール化が進み、さまざまな都市問題が出来した。たとえばウィリアム・モリス（1834-96）が育ったロンドン北東のウォルサムストウ（当時はエセックスの一部で後にグレイター・ロンドンに編入された）は、彼の幼少期は緑の多い環境だったのが、スプロール現象が及び、土地開発と家屋の新築が続いた。1883 年に社会主義運動の同志アンドレアス・ショイのために書いた自伝的スケッチのなかでモリスは「〔自分の生地は〕エピングの森の縁にある郊外の村で昔は十分に快適な所だったが、いまはひどく俗化し、安普請の家が息も詰まらんばかりに建て込んでいる」と書いている（1883 年 9 月 15 日付）。ヴィクトリア朝

期に建てられた一部の壮麗な（ネオゴシックであれ、新古典主義であれ）私邸や公共建築は擱いて、住宅建築全般ということで言えば、それ以前のものと比べて外見的にも実質的にも劣化していたことは否定できない。1940 年代後半のロンドンは 70 年数年後の現在以上にそうしたヴィクトリア朝の安普請の家が多く残っていて、煤煙の効果も相まって、より暗い都市景観を作っていた。それは当時の大方のイギリス人のヴィクトリア朝的なるものへのネガティヴな評価に大いに作用していたように思われる。20 世紀後半に出てくるヴィクトリア朝的趣味の復興はまだ起こっていなかった（The Victorian Society の創設は 1958 年である）。

そういう次第で、『一九八四年』で描かれるロンドンの「汚れた風景」（第 1 部第 1 章）は、ヴィクトリア朝の負の遺産たる安普請の建物群が数次の爆撃による破損を被りながら更新されていない荒涼とした光景であり、そこにイングソックの権力を誇示するような 4 棟の超高層のビルの威容が聳えている。これはヴィクトリアニズムのネガティヴな使用法ということができるだろう。

とはいえ、『一九八四年』のなかでのヴィクトリア朝的なるものにはそれとは対照的なポジティヴな用法がある。第 1 部第 8 章でロンドン北東部、貧民街のジャンク・ショップを訪れたウィンストンは、店内で珊瑚を埋め込んだ美しいガラスの文鎮を見つけ、それを購入する。「それは重いガラスの塊で、片面は丸く、もう一方の面は平らで、ほぼ半球体をなしていた。ガラスの色合いにも手ざわりにも、雨水のような独特な柔らかみがあった」と描写されるその文鎮は、店主のチャリントン氏によれば、「作られてから百年以上たっていますね。いや、見たところそれ以上でしょう」とのことで、じっさいその描写に相当するアンティークとしての文鎮はヴィクトリア朝中期に製造されたものであると推測できる。古い品物を持っていることはこの世界では異端とみなされ危険視される。それを承知でウィンストンがこれをあえて購入し、所持するのは、秘かに日記を付けたり、あるいは古いわらべ唄の断片を耳にしてそれを復元しようとする行為と並んで、オセアニアの支配体制に抗う抵抗の身ぶりと考えることができる。ジャンク・ショップの二階の部屋に飾ってあるセント・クレメント・デインズ教会を描いたスティール・エングレイヴィング（鋼版陰画）もおそらく 19 世紀半ばの品で、これも過去の抹消と捏造を進める支配体制のなかでヴィクトリア朝の製品がオルタナティヴな世界を夢想させるアイテムとなっている（以上の点については拙著『増補 オーウェルのマザー・グース』（岩波現代文庫、2021 年）を参照されたい）。

『動物農場』のなかのヴィクトリア朝

『動物農場』（1945）にもヴィクトリア朝風と呼べる要素が出てくる。オーウェル本人がこの物語を書いた動機を「ほとんどだれにでも簡単に理解できて、他国語に簡単に翻訳できるような物語のかたちでソヴィエト神話を暴露すること」（「ウクライナ語版のための序文」1947 年）と述べているように、これが標的としたのは 1917 年のロシア革命からソヴィエト国家の樹立、スターリンの独裁化、トロツキーの国外追放、大粛清、独ソ不可侵条約、独ソ戦、そして 1943 年のテヘラン会談まで、20 世紀前半のソ連の暗黒の歴史（とソ連を中心とした国際政治）であるのは明らかなのだが、ソ連の五カ年計画など、重工業化の政策を諷刺するのに物語で出てくるのは風車の建設工事であり、その工事も人間の道具は使えず、動物たちの力でやらざるをえない。そもそも物語をとおして近代的な農業機械はまったく出てこない。自動車が見られないだけでなく、鉄道と蒸気機関の言及もない。各種の馬車のみが物語に出てくる唯一の乗り物なのである。

このイングランドの片田舎の農場は、風景描写だけから見ればヴィクトリア朝以前であってもおかしくない。ただし第 2 章で反乱直前にジョーンズが『ニューズ・オヴ・ザ・ワールド』（1847 年創刊の日曜新聞）を開いたまま顔に載せて寝ているし、第 10 章で二本足で歩き出して人間と見分けがつかなくなった豚たちは、ラジオを買いもとめ、電話を取り付ける手配をし、『ジョン・ブル』（1906 年創刊の週刊誌）や『ティット・ビッツ』（1881 年創刊の週刊誌）、それに『デイリー・ミラー』（1903 年創刊の日刊紙）を購読しはじめる。そうすると最後の第 10 章に関しては時代は早くても 1920 年代ということになるのだろうが、そうしたアイテムの言及をのぞくと「モダン」なものは見当たらない。

動物たちの反乱のあと、人間がいなくなった農業住宅（Farm House）におそるおそる見聞に入った動物たちは、「羽根ぶとんが敷かれたベッド、姿見、馬巣織りのソファ、ブラッセルじゅうたん、応接間のマントルピースの上に掛けてあるヴィクトリア女王の石版画」といったものを見る。岩波

文庫版の拙訳で注記したように、このインテリアはヴィクトリア朝後期、あるいは遅くともエドワード朝の中流階級の家庭の趣味を反映している。第 2 章でジョーンズ夫人が動物の反乱を見て農場から逃げ出す際に所持品を入れるカバンは「カーペットバッグ」（carpetbag）と形容されている。これはヴィクトリア朝によく使われたじゅうたん地製の旅行かばんである。また第 8 章でナポレオンは農場住宅の特別室に住み、「応接間のガラス戸棚にしまってあったクラウン・ダービーのディナーセット一式」を用いて食事をするのが常だったとある。「クラウン・ダービー」（Crown Derby）とは英国中部のダービーで 18 世紀末から 19 世紀半ばまでの期間に製造された磁器である。さらに第 10 章で独裁者ナポレオンのお気に入りのめす豚が着飾った服装が、かつてジョーンズ夫人のものだった「ウォータード・シルク」（watered silk 19 世紀英国で上層階級の女性が好んで使った生地のひとつ）のドレスだったという描写も、ヴィクトリア朝的な雰囲気をいや増す仕掛けになっている。

『動物農場』でのこうした描写は、「クラウン・ダービー」や「ウォータード・シルク」の言及でいえば、「すべての動物は平等」である「動物共和国」をめざしたはずの農場で豚が特権化してブルジョワ化し、「リスペクタビリティ（お上品さ）」を身につけたという皮肉を示すアイテムと解することができ、その点で『一九八四年』のロンドンの家並みの描写のような、ヴィクトリア朝的なるもののネガティヴな使用例と見ることができる。だがその一方で、「モダン」な世界を嫌ったオーウェルには、それらの時代遅れの製品は、なんだかんだいって好ましいというか、郷愁の情をかき立てる（全体主義イデオロギー以前の）ものでもあったと言えるだろう。

ディケンズの「寛大さをもって怒っている人の顔」

ヴィクトリア朝の作家でオーウェルがとくに愛読した何人かを挙げるとするなら、チャールズ・ディケンズ、ジョージ・ギッシング、そしてサミュエル・バトラーといったあたりになるだろうか。あるいはコナン・ドイルのホームズもの、また初期の H・G・ウェルズを加えてもよいだろう。

このうちディケンズについては、オーウェルは早くから愛読していたのだが、1938 年 9 月から翌年 3 月まで療養のためモロッコのマラケシュに滞在していた際に、小説『空気をもとめて』（1939）執筆のかたわら、ディケンズの小説の多くを再読し、帰国後の 1939 年に長尺の評論「チャールズ・ディケンズ」を執筆した。これはオーウェルの最初の評論集である『鯨の腹のなかで』（1940）の 3 編の論考の重要な一篇をなす。ディケンズが小説をとおして社会批判をしているとするなら、それは「コモン・ディーセンシー」に基づくモラリストとしての批判であり、それゆえにこそディケンズは作家として成功したのだとオーウェルは主張する。ディケンズの顔を「寛大さをもって怒っている人の顔」――「目下私たちの魂を奪おうと競い合っているうさんくさくちっぽけな正統的教義（orthodoxy）のすべてから等しく憎まれているタイプの顔」――と形容し、第二次世界大戦初期の危機の時代に、このヴィクトリア朝の人気作家の自由な知性に連なろうとする意思表明をオーウェルはこの評論でおこなっている。ディケンズに仮託しての「ふつうの人びと」（人間らしさを備えて道徳律を捨てない庶民）への希望がそこには語られている。その希望は、『動物農場』、『一九八四年』はもとより、一連の評論を併せて、オーウェルのその後の作家としてのキャリアのなかで常に手放さなかったものであった。オーウェルにとってのヴィクトリア朝の最良の遺産は、ふつうの人びとに信を置いた、モラル・ヴィジョンを根本に据えた（ディケンズもその重要な一部をなす）ラディカリズムの伝統であったというのが私の見立てである。

ヴィクトリア朝期は階級の分断と貧富の格差がオーウェルの生きた時代のイギリスよりもはるかに大きくて、その点では民主的社会主義者を自認する彼からすれば理想的な社会とは程遠かったにちがいないし、その時代のイギリス帝国の植民地政策に対しても否定的であったことは論を俟たない。その一方で、1930 年代に跋扈した全体主義イデオロギーが出現する以前の、一定の社会的安定が維持された時代であったという見方も彼は持っていたように思う。たとえば「ラフルズとミス・ブランディッシュ」（1944）や「イギリス風殺人の衰退」（1946）といった探偵小説論のなかにその見方はうかがえる。『一九八四年』でウィンストン・スミスが示す珊瑚の文鎮やスティール・エングレイヴィングといった古い事物へのノスタルジックな想いと、それを力として体制変革を夢見るくだりは、ヴィクトリア朝的なるものへのオーウェルのポジティヴな構えを示すものと考えることができるだろう。

最後に伝記的エピソードをひとつ紹介して本稿の結びとしたい。妻のアイリーンが 1945 年春に急逝し、前年に養子として迎えた幼子リチャードの世話をしてもらうためにオーウェルはスーザン・ワトソンという女性を住み込みのお手伝いとして雇った。そのワトソンが当時のオーウェルの生活ぶりを回想している。ロンドン北東イズリントン区、キャノンベリー・スクエアのフラットでの 1945 年夏から翌年春にかけての暮らしぶりである。

「あの方はお茶〔午後六時のハイ・ティー〕のあとは仕事にもどられ、夜中の三時までタイプを打ちつづけていらっしゃることもしばしばでした。私はタイプライターの音にすっかり慣れてしまったものですから、音がやむとかえって目が覚めてしまうほどでした。夜の十時になると、初老のヴィクトリア女王が描かれているピンクのマグカップに、ホットチョコレートを注いでお持ちしたものです」（オードリー・コパード、バーナード・クリック編『思い出のオーウェル』1986）。

オーウェル愛用の食器のひとつが、ヴィクトリア女王のポートレイトが描かれたピンクのマグカップであったというこの回想を読んで、『一九八四年』の作者らしくない、意外な一面と見る向きもあるのだろうが、私自身はだいぶ昔にこの回想を初めて読んだとき、「これまたいかにもオーウェルらしい」と感じ入ったのだった。

フロレンス・ナイチンゲール生誕 200 年によせて　木村正子

2019 年に発生した COVID-19 の感染拡大により世界は未曾有のパンデミックを経験し、2021 年現在もなお終息の見込みがつかない状況にある。そんな中で 2020 年はフロレンス・ナイチンゲール（1820-1910）の生誕 200 年にあたる記念の年でもあった。本来なら祝祭的イベント開催の計画もあっただろうが、コロナ渦での医療活動はクリミア戦争時（1853-56）の野戦病院を彷彿させたようである。2020 年 3 月、ロンドンではコンベンションセンター ExCeL London を改装した仮設病院 NHS Nightingale Hospital が開設され、4,000 床を有する巨大な施設には、各ベッドにパーティションと人工呼吸器が設置された。この病院にナイチンゲールの名前が冠されたのは、クリミアの英雄の存在が今も忘れられていないことを示唆するものであろう。

一般的にナイチンゲールと看護はワンセットで認識されるが、当時「クリミアの天使」や「ランプを掲げるレディ」という呼称が示すように、ナイチンゲールは戦場での救済者のアイコンであった。実際ナイチンゲールが看護活動を行ったのはクリミア期と呼ばれる 2 年間とその前の数年間に過ぎない。だがその短い期間での経験が後の執筆活動の原動力となったのは確かである。20 世紀以降の医療は急速な発展を遂げ、ナイチンゲールが提唱した看護はもはや時代遅れの感があるが、近年の研究は看護の領域を超えた分野でのナイチンゲールの尽力に注視している。生誕 200 年を迎えたのを機に、クリミア期のナイチンゲールを振り返りつつ、21 世紀のナイチンゲールの意義を考えてみたい。

ナイチンゲールがトルコのイギリス軍基地であったスクタリへ赴いたのは 1854 年 10 月、戦争大臣シドニー・ハーバートから任命を受けてのことだった。そもそもなぜナイチンゲールがスクタリへ派遣されたのか。この任命のひと月前まで、ナイチンゲールはハーバートの妻リズが運営する病院での看護監督を務めており、その手腕が認められたというのが筋だろう。しかし理由は別にあった。ハーバートによると、ナイチンゲール家が持つ社会的ステイタスが決め手となったようだ。政府の意図として、上流階級のレディが戦地の救済活動に赴くこと、すなわちヴィクトリア朝女性の理想像である〈家庭の天使〉たる女性を送りこむことが、兵士たちの士気を高揚させるためにも、そして本国の国民意識を高揚させるためにも重要であった。実は、身分の高い女性が戦地の病院での監督の任に就くのは、ナイチンゲールが初めてのケースではない。1849 年のイタリア共和国では、ナポレオン軍に制圧されるまでの短い期間ながら、貴族出身の女性クリスティナ・トリヴルツィオ・ベルジオホソが病院長を務めていた。これは公的な要請による活動ではないだろうが、戦地での看

護活動という点でナイチンゲールの先達となる。ナイチンゲールが特に注目を浴びたのは、政府の要請を受けていることで、国家による宣伝効果を狙ったものであろう。

ナイチンゲールの出発に伴い、イギリスの新聞『タイムズ』紙も現地に特派員を派遣した。『タイムズ』紙は現地からリアルな情報を発信することはもとより、ナイチンゲールの活躍を宣伝し、救援物資のための基金を設立するに至る。ナイチンゲールの呼称である「ランプを掲げるレディ」も『タイムズ』紙の記事に由来するもので、ジャーナリズムによるイメージ戦略はナイチンゲールを一気に国民的英雄に祭り上げた。ところがスクタリの病院では、ナイチンゲールの組織運営に対する不満と批判が続出して、看護師たちが離脱し始めていたのである。

スクタリではナイチンゲール率いる看護師団とは別組織の集団も救援活動を行っていた。キリスト教会から派遣された集団には、宗派の相違を超えた協力体制は困難で、それぞれが独自の組織で動いていた。また旧イギリス領ジャマイカ出身のメアリ・シーコールのように、ナイチンゲール看護師団への参加を拒否され（ナイチンゲール看護師団はレディの集団である）、自費でクリミアへ渡り看護に従事したケースもある。当初ナイチンゲールの任務は看護監督であったが、後に病院全体の責任を任される立場となり、病院の医師たちとの間での意見の相違が目立つようになった。しかしナイチンゲールにとって深刻な問題は離脱する看護師たちの数よりも、病院での死者の数であった。統計上、ナイチンゲールが勤務する病院では他の病院に比べて、極端に患者の死亡率が高かったからである。

なぜスクタリでは患者の死亡率が高いのか。クリミア時代のナイチンゲールは、病院に運びこまれる患者の重症度が高いこと、本国からの物資供給の不足による栄養失調や衛生状態の悪さなどが原因と考えており、本国から派遣された調査団（文民調査団）も同じ結果を発表したことから、責任は軍本部にあるという構えであった。しかし 1858 年にナイチンゲールが考案した死因別（戦地での負傷、伝染病、その他）の統計図表「鶏冠グラフ」は、圧倒的な死因は伝染病であることを示している。旧兵舎だった建物を転用した病院は破損した排水溝に上に建てられており、汚物に不着した細菌が病室の床から拡散していったのである。クリミア期と 1858 年の統計グラフ作成時とで、患者の死因に対するナイチンゲールの見解が相違していることは非常に重要である。

ナイチンゲールの帰国は 1856 年 8 月。その後調査団のメーンバーや医師たちとチームを結成して報告書作成に取りかかっている。しかしこの時期のナイチンゲールに関する資料が欠損し、まったく空白の期間もある。そのため過去の伝記作家たちはこの時期に関しては看過するか、もしくは他の資料から憶測するしかなかった。ところが近年ヒュー・スモール著『ナイチンゲール小史』が、新たな手紙 2 通の発見により、この時期の謎を解明する手がかりが得られたことを発表した。1 通目（1855 年、戦地から陸軍大臣あて）では、スクタリの病院では重症患者が搬送されるために死亡率が高いと述べているのに対し、2 通目（1857 年 5 月、文民調査団ジョン・マクニールあて）では、病院そのものが患者の症状を悪化させる原因になったと述べ、死因に関する見解が相違している。ナイチンゲールの認識に変化が生じたのは、2 通目の手紙以前の時期ということだ。

この時期の特定化が重要となるのは、その後のナイチンゲールの活動の重点が看護から公衆衛生問題にシフトすることを裏づけるからである。スクタリの病院の衛生問題は、都市のスラム街の衛生問題と無関係ではない。イギリスでは 1848 年に公衆衛生法が成立しているが、大幅な衛生改革を実行するには 1875 年の公衆衛生法成立が必要であった。ナイチンゲールは 1857 年 5-7 月の王立委員会のために、極秘で報告書作成に奔走していたが、その内容が政府に認められるのに 18 年もの年月を費やしたことになる。この間のプロセスはスモールの著書に詳しいが、ナイチンゲールのチームが、病院設備の不備が健康被害に直結するという結果を出したとしても、内閣、議会、軍本部、医学界にはそれぞれの思惑や利害関係があり、簡単に通過するものではない。医学界が注力していたのは最新の医学研究であり、現前の衛生状態の改善ではなかった。

1859 年、ナイチンゲールは代表的な著書『看護覚え書』を出版する（現在第 1 版と呼ばれるのは 1860 年の版である）。この書の要点をまとめると、看護に必要なものは病室の換気・衛生・過密の回避となるが、これら三つの要素はこの一年あまりの間、新型コロナウィルス感染予防対策として耳にしない日はなかったものである。つまりナイチンゲールが看護の必要条件として提示したものは、そのまま今日の感染症予防の必要条件として適用でき、この書は衛生管理マニュアルでもあったと

わかる。初版出版時のイギリスでは、インフラの整備などの公的機関の役割は最優先事項ではなかったゆえ、個人や家庭レベルで実行できる感染防止策を訴えたのであろう。この時点ではまだウィルスの発見はなされていない。一説にはナイチンゲールはウィルスの存在を信じなかったといわれるが、『看護覚え書』でのナイチンゲールの姿勢からすると、その説にも一石を投じることになろう。

しかしこうした尽力にもかかわらず、公衆衛生の分野でナイチンゲールの名前が言及されることはない。しかし生誕 200 年を迎えた今、ナイチンゲールの提言は過去の遺物ではなく、私たちの日常の中に生きていることは明らかだ。看護の分野でのナイチンゲールは古いというのであるなら、21 世紀のナイチンゲールの意義は衛生改革のパイオニアであるといってもよいのではないか。

参考文献

Cook, Edward Tyas. *The Life of Florence Nightingale*. 1913. Dossier, 2015. 2 vols.
Nightingale, Florence. *Notes on Nursing: What It Is, and What It Is Not. Florence Nightingale and the Birth of Professional Nursing*, edited by Lori Williamson, vol. 1, Thoemmes, 1999.
Small, Hugh. *A Brief History of Florence Nightingale*. Constable, 2017.

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2020 年度総会

日時：2020 年 11 月 28 日（土）17 時 35 分～17 時 50 分
場所：Zoom（司会　玉井史絵事務局長）
議題
【報告事項】
１．2020 年度活動報告・活動予定
Ⅰ．運営委員会、役員会関係
2020 年 8 月 2 日　第 2 回　大会企画準備委員会（Zoom）
2020 年 8 月 13 日　第 1 回　運営委員会（Zoom）
2020 年 11 月 14 日　全国大会 Zoom リハーサル（第 1 回）
2020 年 11 月 20 日　全国大会 Zoom リハーサル（第 2 回）
2020 年 11 月 27 日　理事会（Zoom）
2021 年 3 月 25 日　第 2 回　運営委員会（Zoom）

2020 年 1 月 25 日 第 1 回　編集委員会（同志社大学）
2020 年 8 月 24 日 第 2 回　編集委員会（Zoom）

Ⅱ．学会誌、ニューズレター
2020 年 5 月　*The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 19 発行
2020 年 11 月　『ヴィクトリア朝文化研究』（*Studies in Victorian Culture*）第 18 号発行

Ⅲ．全国大会関係
2020 年 11 月 28 日　第 20 回　全国大会開催（Zoom）

Ⅳ．その他
事務局の引き継ぎ
2020 年 4 月　事務局の引き継ぎ（銀行口座の移転、メーリングリストの移行）
2020 年 5 月　旧メーリングリストの閉鎖

◎会員動向　対象期間：2019 年 4 月 1 日から 2020 年 3 月 31 日まで

新規入会者　12 名　　退会者 7 名
2020 年 3 月 31 日現在　会員 321 名（うち学生 22 名）

2．学会誌について
上記の通り、発行された。

3．大会・企画委員会の活動について
高橋美帆大会･企画委員長より､大会･企画委員の各氏が 2021 年度大会の準備を進めると共に、学会を活性化するための企画を計画中であることが、報告された。

4．学会企画事典の進捗状況について
大石和欣事典編集委員会副委員長より、事典の計画の進捗状況について報告された。

5．その他
特になし。

【審議事項】
1．2019 年度決算
資料に基づき報告され、了承された。

2．2020 年度予算案
資料に基づき報告され、了承された。

3．　2021 年度の大会について
第 21 回大会は、2021 年 11 月 20 日（土）に同志社大学新町キャンパスにて開かれる予定であることが報告され、了承された。

4．その他
特になし。

2019 年度決算報告書（2019.4.1-2020.3.31）

【収入の部】　　単位：円

項　目	金　額	備　　考
前年度繰越金	5,028,806	
利子	30	ゆうちょ銀行
出展料	10,000	2 社
学会費	1,812,000	
学会誌販売	3,000	非会員向け（うち 1, 000 円は口座振り込み）
過年度調整金	9,680	
合　計	6,863,516	

【支出の部】

項　目	金　額	備　　考
通信費	81,499	通信費＋振込手数料等

大会経費	340,101	大会会場費、プログラム・ポスター製作、郵送費、アルバイト料など（講演謝礼 50,000 円を含む）
懇親会費	-40,950	会場使用料、飲食代（黒字として計上）
学会誌作成・郵送費	602,980	
学会誌用図書費	78,010	
振込手数料	1,004	謝礼、交通費等振込時の手数料
消耗品費	4,137	文具等
役員会費	0	理事会会場費
役員交通費	313,720	理事会・事典編集委員会（大会時を除く）
非会員謝礼・交通費	40,000	学会誌執筆謝礼（4 名）
事務局員謝礼	312,000	月 10,000 円×2 名　月 6,000 円×1 名
その他	25,236	次年度封筒印刷費
合　計	1,757,737	
次年度繰越金	5,105,779	

以上の通りご報告いたします。

2020 年 9 月 1 日　　会計　佐藤和哉

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2020 年 9 月 12 日　　会計監査　松村伸一

2019 年度懇親会決算報告書（2019.11.23）

【収入の部】　　単位：円

項　目	金　額	備　考
懇親会費事前振り込み	197,000	5,000 円×39 名+2000 円×1 名
懇親会費当日支払い	0	
合　計	197,000	

【支出の部】

項　目	金　額	備　考
会場支払い分	150,000	
ワイン分持込み	6,050	
合　計	156,050	

＊収入―支出	40,950	学会会計に繰り入れ

以上の通りご報告いたします。

2020 年 8 月 31 日　　会計　佐藤和哉

上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。

2020 年 9 月 12 日　　会計監査　松村伸一

2020 年度予算案（2020.4.1-2021.3.31）

【収入の部】　　単位：円

項　目	金　額	備　考

前年度繰越金	5,105,799	
利子	30	
会費	1,980,000	前年度未納の会費収入予測も含めた額
出展料	0	
学会誌販売	3,000	2019 年度は 3, 000 円
合　計	7,088,829	

【支出の部】

項　目	金　額	備　考
通信費	100,000	2019 年度　81, 499 円
大会経費	30,000	2018 年度　282, 334 円
懇親会費	0	2018 年度は学会からの支出はなかったが、2017 年度は約 85, 000 円
学会誌作成・郵送費	650,000	2019 年度　602, 980 円
学会誌図書費	80,000	書評用図書　2019 年度　78, 010 円
振込手数料	3,000	
消耗品費	5,000	文具等　2019 年度　4, 137 円
役員会費	0	理事会、運営委員会、編集委員会（19 年度　0 円）
役員交通費	300,000	運営委員会、編集委員会（19 年度　313, 720 円）
非会員謝礼、交通費等	50,000	2019 年度　40, 000 円（学会誌謝礼）
事務員謝礼	312,000	月 10, 000 円×2 名、月 6, 000 円×1 名
その他	25,000	2019 年度は封筒印刷代として 25, 236 円
合　計	1,555,000	

次年度繰越金	5,533,829	

合　計	7,088,829	

第 21 回大会のお知らせと研究発表の募集

第 21 回大会は、2021 年 11 月 20 日（土）に同志社大学新町キャンパスで開かれる予定です。シンポジウムの題目は「Ballets Russes―ロマン主義からモダニズムへの変革」で、モデレーターは桐山恵子氏（同志社大学准教授）、パネリストは、阪本洋三氏（近畿大学教授）、関典子氏（神戸大学准教授）の予定です。

特別講演は David Chandler 氏（同志社大学教授）にお願いすることになっています。予定のテーマは ‘Victorian Opera’です。どうぞふるってご参加ください。

研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、発表要旨（400 字）と略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）および主要業績を記した Word ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いします。**締め切りは 2021 年 7 月 4 日（日）必着です。**

今年度より、学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励する目的で、運営委員会と理事会の議を経て、「学生会員大会研究発表補助金規定」を制定いたしました。大会研究発表を行う当該年度に本学会の学生会員である者を対象に、10, 000 円を支給いたします。（ただし、この補助を受けた会

員は大会後最低 2 年間、会員として在籍しなくてはなりません。）詳細は、事務局までお問い合わせください。

なお今後の新型コロナウイルスの状況によっては、zoom による開催等を含め、上記計画に変更が生じる可能性があること、どうぞご了承ください。

第 22 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2022 年 11 月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 22 回全国大会（開催場所と日時は今年の 8 月に決定される予定です）における、シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。**締め切りは 2021 年 10 月末日（日）必着**といたします。**締め切りが昨年度よりも 2 か月早くなりました**ので、ご注意ください。

シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については、運営委員会（2022 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締め切り：2021 年 10 月末日（日）必着
2. 申請方法：下記の申請書必要記載事項を記入した Word ファイルを、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局まで、メールにてお送りください。
3. 申請書必要記載事項
   ① シンポジウム・ラウンドテーブルのタイトル
   ② 趣旨（400 字程度）
   ③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
   ④ プログラム
   1)司会（氏名、所属）2）報告者（氏名、所属）3）各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）4)タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〔休憩含む〕に収まるように計画してください）
   ＊シンポジウム・ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。
4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
   〒610-0394　京田辺市多々羅都谷 1−3
   同志社大学グローバル・コミュニケーション学部　玉井史絵研究室内
   Tel: 0774-65-7223
   E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com

編集後記

昨年世界中を席巻した新型コロナウイルスは、今年に入っても猛威をふるっています。研究・教育両面の御活動で大変お忙しい中、川端康雄先生と木村正子先生から、玉稿をお寄せいただきました。心よりお礼申し上げます。今後の感染状況は予断を許しませんが、今秋こそ一堂に会する大会となることを願ってやみません。（NL 担当　杉村醇子）

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1−3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部
玉井史絵研究室内
ＴＥＬ：0774-65-7223
E-mail：victorianstudies.japan@gmail.com
発行日：2021 年 5 月 1 日